

幕末維新期における村と地域

渡 邊 尚 志

はじめに

幕末維新期の村落史研究は、近年大まかに言って停滯しているように思われる。その原因としては、研究の個別分散化というどの時代にも当てはまる要因のほかに、世直し状況論の存在が大きいと言える。私は、世直し状況論はこれまで近世史の側から提出された幕末維新期論としては最良のものだと考えているが、世直し状況論に対しては現在のところ批判は出るが対案が出ないという状況であり、それが研究の閉塞状況を生み出している一因なのではなからうか。私は、今こそ世直し状況論が提起した論点を正面から再検討し、継承すべき点は継承し批判すべき点は批判して、新たな地平を切り拓くことが要請されていると思う。本稿では、以上の課題意識に立ちつつ、幕末維新期の村と地域の問題に迫りたい。

本稿で対象とするのは、武蔵国多摩郡連光寺村とその周辺地域である。^① 連光寺村は村高三二二石余、明治三(一八

七〇)年の家数一一五戸であり、村の中を玉川が貫流していた。また江戸へ九里の所にあり、甲州道中府中宿の南に接し、甲州道中日野宿や八王子宿とも近い距離にあった。支配は、寛永一〇(一六三三)年以降幕末までずっと旗本天野(八一〇石知行)の一給支配であった。表1に連光寺村の階層構成を示したが、同村では幕末期においても農民層分解の進行は押しとどめられている。天保一四(一八四三)年には、八二軒中二一軒の農間商人・職人がおり(全戸数の二六%)、農間余業としては炭焼や養蚕が行われていた。また、明治三年には、人口六六五人のうち六六人(全人口の一〇%)が出稼・奉公などで村を離れていた。²⁾本稿で使う史料は、主として国立史料館所蔵の連光寺村富沢家文書、富沢分家文書である。³⁾

以下、第1章では村方騒動と農兵設置の問題を中心に幕末維新期の村と地域のありようを検討し、第2章では村内部に立ち入って村請制村と村落共同体との関係を分析したい。

第1章 幕末維新期の村と地域

1 天保～安政期の騒動の検討

本節では、天保～安政期の連光寺村の騒動について検討したい。まず、騒動の主要登場人物について述べておく。富沢本家の魯平・準平(のち忠右衛門と改名)父子が一方の中心人物である。同家は、畠山重忠の末裔で、戦国期には今川氏に属して後北条氏の馬飼場のあった連光寺を攻略し、その後同地に土着したという由緒を主張しており、近世を通じてはほぼ名主役を世襲していた。また、安政六(一八五九)年三〇石五斗余、明治二年約四三石を所持し、表1の階層構成でわかる通り村内ではずば抜けた経済力をもっていた豪農であり、改革組合村の大惣代をも勤めていた。

表1 連光寺村階層構成表

天保14年

	連光寺村	本 村	馬 引 沢	下 川 原	舟 郷
10 ~ 石	2 [^]	2 [^]	0 [^]	0 [^]	0 [^]
9 ~ 10	0	0	0	0	0
8 ~ 9	1	1	0	0	0
7 ~ 8	0	0	0	0	0
6 ~ 7	3	1	1	1	0
5 ~ 6	2	1	0	1	0
4 ~ 5	8	3	5	0	0
3 ~ 4	8	3	5	0	0
2 ~ 3	12	5	5	2	1
1 ~ 2	25	12	2	11	5
0.5 ~ 1	16	4	2	10	6
0.1 ~ 0.5	10	3	0	7	7
~ 0.1	4	4	0	0	2
0	0	0	0	0	0
計	91	39	20	32	21

富沢家文書1132より作成。

明治2年

	連光寺村	本 村	馬 引 沢	下 川 原	舟 郷
10 ~ 石	3 [^]	2 [^]	0 [^]	1 [^]	0 [^]
9 ~ 10	1	0	1	0	0
8 ~ 9	1	0	0	1	0
7 ~ 8	3	1	2	0	0
6 ~ 7	1	0	1	0	0
5 ~ 6	2	2	0	0	0
4 ~ 5	5	2	3	0	0
3 ~ 4	8	2	5	1	0
2 ~ 3	13	7	2	4	0
1 ~ 2	26	10	3	13	7
0.5 ~ 1	14	7	1	6	3
0.1 ~ 0.5	8	2	2	4	11
~ 0.1	6	4	0	2	7
0	0	0	0	0	0
計	91	39	20	32	28

富沢家文書1127、1140より作成。舟郷のみ元治元年の数値である。

この富沢本家と対立するもう一方の中心人物が富沢分家の宗左衛門とその子の造酒三郎・宗次郎兄弟である。同家は延宝三（一六七五）年に本家から分れて以降土地集積を進め、安政六年三〇石余、明治二年四〇石余と村内で本家に匹敵する土地を所持し、明治二年にはさらに村外に約七四石を所持する豪農であった。同家は商業・金融活動も行い、金融活動の範囲は居村を中心に周辺二〇ヶ村にわたっており、江戸町人との取引もみられる。そして、富沢分家側に立ち、騒動後半には騒動の中心に出てくるのが増五郎である。彼は、天保一五年の持高約三・四石、明治二年約一・八石に過ぎないが、永田屋という屋号をもち、慶応四（一八六八）年には質・古着・糸繭渡世を営んでおり、慶応三年には江戸・八王子を含む一六ヶ町村から二一〇六両の借金をしていた。ここからわかるように、彼は商人的要素の強い百姓であった。

次に、騒動の経過を表2によりつつ概観しておく。本騒動は概ね次の四期に区分できる。

第一期・・・天保一四～弘化二（一八四五）年

財政難に苦しむ旗本天野は、その打開のため、天保九年に渡り用人の加藤勝太夫を新しく用人に起用し、天保一二年には富沢分家の宗左衛門を天野の全知行所を管轄する勝手向賄名主に任命し、連光寺村についてもそれまで名主役を世襲してきた富沢本家の魯平に加えて、宗左衛門を相名主に据えた。すなわち、勝太夫―宗左衛門ルートで村方からの御用金・先納金の収奪を強行しようとしたのである。

この領主の収奪強化策は村方との軋轢をすぐに表面化させ、天保一四年には宗左衛門が年貢金を二重に取り立てたとして、村方から地頭所への出訴がなされた。このとき魯平は老齢を理由に退役を申し出たが、村方一同で入札の結果魯平父子が落札となった。宗左衛門は二重取り立て分を返金するが、村方百姓はあくまでも宗左衛門の退役を要求し、彼との付き合いを省いた。折しも上知令が発令されており、地頭所側はこの際これまでの先納金を全て上げ切に

するなら宗左衛門を退役させる
とし、村方もそれを了承して宗
左衛門は退役することとなる。
ところが、同年九月上知令が撤
回され、勝太夫・宗左衛門側は
巻き返しを図る。すなわち、騒
動は旗本用人の後ろ盾をもつ富
沢分家と村方惣百姓の支持を得
た富沢本家との対立という形で
始まった。

弘化二年四月、本村にある高
西寺住職の「不祥事」をめぐる
一件が起こり、一件自体は内済
となったのだが、勝太夫・宗左
衛門側からこの一件に際して村
方の百姓が宗左衛門を名主と心
得ないのとは不埒だというクレ
ームがつき、騒動は再燃し、魯平

表2 村方騒動の経過

天保9	加藤勝太夫、用人となる
天保12.5	富沢宗左衛門、勝手向賄名主となり、連光寺村についても富沢魯平と相名主となる
14	村方百姓が宗左衛門の年貢金二重取り立てを地頭の旗本天野へ出訴→宗左衛門二重取り立て分返金するも、村方は宗左衛門退役を要求し、付き合いを省く 魯平退役申し出→村方一同入札の結果魯平父子落札
弘化2.4	騒動再燃、魯平はじめ百姓多数江戸に呼び出され、農作業の遅れや多額の雑用金により難渋する
6.26	未明、江戸の地頭屋敷に門訴
8	地頭所側、魯平はじめ9人を勘定奉行所へ出訴→勝太夫は従来の組頭・百姓代を退役させ、新たに増五郎たちを村役人に任命し、小前には宗左衛門に従うよう圧力
嘉永2.	宗左衛門病死
3	勝太夫病死→跡役山崎弥左衛門、彼は縁者の増五郎を造酒三郎（宗左衛門の子）と共に名主代にする
4~5	本家側の17人から分家側に詫状提出
安政元	魯平・準平側と地頭所との間で内済成立し、幕府へ吟味下げ願い出される
安政3	幕府、吟味下げ承認、双方「中直り」→一件の雑用を勘定したところ、増五郎たちによる過分の取り立てが発覚し、騒動に
4.1	増五郎たちが超過取り立て分の一部を小前へ割り戻し、残りは村方に詫びて勘弁してもらうことで決着→増五郎、村民の支持を失う
6	忠右衛門、宗次郎（富沢分家、造酒三郎弟）が年番による相名主→同年、宗次郎死去→以後、忠右衛門が名主を勤続

はじめ大勢の百姓が江戸に呼び出され、地頭所で吟味を受けた。このため、農作業の遅れや多額の雑用金の支出により難渋した百姓達は、同年六月二六日未明江戸の地頭屋敷に門訴を決行する。これに押されて、地頭所側は、魯平が隠居し、俸進平が跡名主となることを承認し、一件はひとまず決着する。

第二期・・・弘化二〜嘉永二（一八四九）年

弘化二年八月、地頭所側は態度を一転させ、魯平たち九人を地頭所からの用捨米・救米押領などのかどで、幕府勘定奉行所へ出訴する。勝太夫は、従来の組頭・百姓代を退役させ、新たに増五郎たちを村役人に任命して味方につけ、さらに訴訟を有利に進めるため、村方百姓達に圧力をかけた。しかし、幕府の吟味は魯平側に有利に進行して吟味詰めとなり、嘉永二年一二月には魯平に不正はなかったという内容の仮口書が作成された。

第三期・・・嘉永三年〜安政三年

仮口書は作成されたものの、幕府の吟味はなかなか結審に至らない。この間、嘉永二年に宗左衛門が病死し、翌嘉永三年一月には加藤勝太夫が病死する。勝太夫の跡役には、組頭増五郎の縁者山崎弥左衛門が就任し、増五郎が宗左衛門の子造酒三郎と共に名主代となり、地頭所側は新たに弥左衛門・増五郎ラインで態勢の挽回を図る。増五郎のよいうな商品・貨幣経済の進展の波に乗って成長してきた商人的色彩の強い百姓が騒動に中心的に関わったことが、騒動長期化の一因だといえる。そして、弘化三年以来、村方百姓の内に富沢分家側を支持する者が現れてきていたが、嘉永四年〜五年にかけてそれまで本家側についていた一七人から分家側に詫状が出されている。さらに、嘉永五年九月には、江戸吉川町の家主勘三郎が本家側の組頭・武兵衛外四人を相手取り、訴訟費用に貸した金の元利返済を求めて幕府へ出訴するなど、この時期本家側が苦境に立たされる。こうして騒動が長期化するうち、対立の構図は、本家側と分家・増五郎側とが村内を二つに割って争い、地頭所は分家・増五郎側を支持するという形に変化する。

第四期・・・安政元～六年

その後、安政元年になって、村方と地頭所との間でやっと内済が成立し、村方・地頭所双方から勘定奉行所に吟味下げ願いが出される。これを受けて、安政三年一〇月吟味下げとなり、同月扱人並びに双方一同で「中直り」が行われた。この時、地頭所側は、魯平たち三人を改めて役儀取放とし、一件は地頭所・富沢分家・増五郎側の勝利かと思われた。しかし、その後、この間の一件雑用を一同立会勘定したところ、名主代増五郎と組頭二名による過分の取り立てが発覚し、安政三年暮には「小前之者共」が組頭宅へ大勢押し掛ける騒ぎになり、翌年正月に、超過取立分の一部を小前へ割戻し、残りは村方に詫びて勘弁してもらうということでひとまず決着をみた。この一件で増五郎は村民の支持を失う。小前達はさらに魯平達を村役人にするよう要求し、安政五年三月には忠右衛門（魯平は安政四年病死）が地頭に詫びを入れる形で解決を見、忠右衛門は同月名主見習となり、翌年分家の富沢宗次郎と一年交代の相名主となった。しかし、同年宗次郎が死んだため、以後忠右衛門が名主を勤続し、一件中本家側に立っていた人々が村役人に加わる。こうして、安政六年、一件は本家側に有利な形で最終的に解決したのである。

以上が、この争論の概要であるが、ここで注意しておきたいのは以下の諸点である。

(一) まず、この騒動の結果について確認しておきたい。この騒動は当初富沢本家・惣百姓対富沢分家・地頭用入という明確な対立関係をもって始まったが、騒動の長期化のなかで次第に分家側に与する百姓が増え、最後は本家・分家の相名主という騒動前と変わらぬ形に落ち着いている。そこで、一見この騒動は村方に何の成果もたらさなかったかにみえるが、実はそうではない。その成果とは、一言で言えば本家であれ分家であれ、小前百姓の支持を取り付けなければ安定した村運営を持続させることができなくなったということである。具体例をあげよう。安政二年一〇月の大地震で地頭の江戸屋敷が大破したため、時の名主代富沢分家宗次郎は、江戸の地頭屋敷で天野知行所その他二

ケ村の村役人と共に御用金を命じられた。他二ヶ村はその場で了承したが、宗次郎は、当時の連光寺村が騒動も未だ最終決着せず「乱村」状態なので、自分一人で請け合うわけにはいかない、ひとまず帰村の上、小前一同に図つたうえで返答したい、と地頭に答えて帰村した。そして、小前全員を自宅に呼んで小前の了承を得たうえで御用金を引き受けたのである。このように、当初は地頭の支持を最大の後ろ盾としていた富沢分家も、騒動を経るなかで小前の合意を取り付けつつ村運営を進めるように変わっていったのである。安政六年名主に復帰した富沢本家の忠右衛門も、同年地頭の先納金を引き受けるについては、他の村役人に相談の上、小前一同の了承を得るという手順を踏んでおり、こうしたプロセスが定着していることがわかる。このような村運営がなされたことにより、万延く慶応期の連光寺村は一応の安定をみたのである。

(2) 以上の分析結果は、世直し状況論における豪農論、村方騒動論の理解では説明がつかない。世直し状況論では、豪農層は貧農・半プロ層と決定的に対立しており、村方騒動の過程で一部の豪農が貧農・半プロ層の支持を得ることがあってもそれは本質的なものではないとされた。⁴⁾しかし、本騒動の検討からみる限り、豪農にも異なるタイプが存在すると思われる。私は、以前に豪農層は、その政治主体としての行動形態によって、在村型豪農Ⅰ、在村型豪農Ⅱ、「草莽の志士」型の三タイプに分けられることを述べた。⁵⁾在村型豪農Ⅰは、小前・貧農層の経営の維持・安定、村の再編を自己の経営発展の不可欠の前提として重視する、即ち他利のなかで自利を追求するタイプであり、在村型豪農Ⅱは自己の経営拡大が中心目的で、小前・貧農層の経営安定など村全体の問題には関心を払わないか、あるいは村を自己の経営発展のために利用しようとするタイプである。これに対して、「草莽の志士」型は村運営には消極的で、村を飛び出して政局に身を投じ、尊王攘夷運動に奔走するタイプである。そして、豪農層がこれら三タイプのどれに属するかは、彼の経営と教養の内容によるとともに、彼を取り巻く村内部の社会関係、小

前層との力関係によって決定されるといえる。

ひるがえって、連光寺村の場合をみると、騒動の当初の段階では富沢本家と分家のありようは対照的である。本家は、村方の百姓達の支持を基盤に村役人を勤めており、在村型豪農Ⅰのタイプであり、分家は領主によって新たに村役人に任命され、領主の支持を最大の後ろ盾として村内における支持基盤の弱さをカバーしようとしており、在村型豪農Ⅱのひとつのあり方を示している。そして、騒動の進行につれて、小前層の圧力に押されて富沢分家も在村型豪農Ⅰ的に振る舞わざるを得なくなり、安政六年以降名主を勤続した富沢本家も、より一層小前層に配慮した村運営を行わなければならなかったのである。

こうした村方騒動のあり方は、豪農—半プロ間の対立を幕末維新期村落の一貫した基調だとする世直し状況論では説明できないのであり、豪農層の政治主体としての行動については、類型論を取り入れて考えなければならぬと思う。

(3) (2)との関連で、この騒動後に名主になった忠右衛門が在村型豪農Ⅰとして新たにどのような村運営を行ったか、二点みておきたい。①彼は名主になった翌万延元年に、新たな用水路を開削し、畑二町歩余を水田化した。こうした生産力発展に果す豪農の積極的役割がまずあげられる。②同年、彼が中心となって村内に桜の木三七五本を植樹し、そこに芭蕉の句と本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」の歌を刻んだ石碑を建てようとした。忠右衛門は一八歳から国学を学んでおり、宣長の歌碑には彼の天皇權威への接近をみてとれようが、より重要なのは次の点である。すなわち、この時には村民の内四〇名が桜や藤を寄付しているが、そのうち過半数の二一名が俳号を名乗っているのである。ここに、村内における俳諧の広範な普及をみてとれるとともに、松園という俳号をもつ忠右衛門が村内の俳諧仲間を中心に村に桜の名所をつくることにより、村民の精神的紐帯を強化しようとしていることが注目される。忠右衛門は、また天然理心流の剣術も学んでいたが、これも彼個人の趣味・教養にとどまらず、

次節でみるように村ぐるみの農兵隊を組織して治安維持にあたる際に大きく役立っている。このように、幕末期豪農の趣味・教養は単に個人のものにとどまらず、また従来指摘されているような豪農層間のネットワーク作りという意味合いをも越えて、豪農が小前層の支持を得て村や地域の運営を行う際の有力な手段として機能しているのである。すなわち、幕末維新时期においては、地域における文化的水準の上昇に対応して、豪農層は家柄と財産のみではなく、文化・教養の面でもイニシアティブを発揮することが要求されていたのである。そして、こうした在村型豪農Ⅰのあり方は、近代の地方名望家に連なっていくものであり、事実富沢忠右衛門は明治一二年神奈川県会議員となり、その子政賢は明治二年初代多摩村長になっているのである。

(4) 最後に指摘したいのは、この騒動が村内だけの問題に止まらず、地域社会をも巻き込んでいることである。すなわち、魯平が改革組合村の大惣代を勤めていたこともあって、兩陣営とも地域の支持を取り付けようと動いていたのである。まず、本家側支持の動きを示すものとして、史料1を掲げる。

史料1⁽⁶⁾

乍恐以書付御歎願奉申上候

甲州道中日野宿外四拾三ヶ村御改革組合宿村役人惣代左之者共奉申上候。私共組合大惣代之儀^者武州多摩郡蓮光寺村名主魯平柴崎村名主治郎兵衛兩人^ニ而相勤、組合高老万五千石余過半山寄村々多く場広^ニ而玉川浅川等を差跨出水等差支之節^者兩人手分々諸世話罷在候処、右魯平儀御地頭所^ニ去巳八月中当御奉行所様^江御差出^ニ相成当時御吟味中魯平儀^者出府罷在私共并大惣代^人而万端行届兼候^処、先達^而中^ニ魯平申越候^者御地頭所御糺已前^ニ老年隠居相願候程之義^ニ付惣代跡役相立吳候様度々申聞、一昧右大惣代之儀^者御改革初発御出役様方御見立被仰付是迄不調法無之數年来相勤罷在、今更外^ニ相勤候者無御座魯平引続相勤吳候様達^而申入候得共、老衰御吟味奉受候之身分迎も

相勤リ兼候旨申之、乍併數ヶ村組合大惣代相勤候者相応之身分平日柔和寄合等之節も成丈無益之入用等不相掛不
依何事厚世話いたし却而老年ニ無之候而者人氣ニ相叶不申、尤何様之御吟味筋ニ御座候哉私共相弁不申奉恐入候得共、
一件無難ニ相済帰村世話致候様仕度、万一魯平退役相成候而者惣代役相勤リ不申村々一同迷惑仕候間、不奉願恐も御
歎願奉申上候。何卒以御慈悲前書之趣 御賢察被成下置右願之通御聞済被成下置候様仕度、偏ニ奉願上候以上。

甲州道中日野宿組合

四拾四ヶ村

村役人惣代

誰知行所

武州多摩郡何村

名主

誰

江川太郎左衛門支配所

同州同郡日野宿

役人惣代

名主

年寄

誰

様

史料1は、改革組合村である日野宿組合四四ヶ村村役人物代からの嘆願書の下書である。そこでは、魯平に代わって大惣代を勤められる者がいないため、一件を無難に落着させ、魯平が大惣代を勤続できるようにしてほしい旨が述べられている。内容はこれと若干異なるかも知れないが、弘化三年一月に組合村大小惣代連印の嘆願書が勘定奉行所に提出されている。また、弘化二年八月には、大惣代の柴崎村次郎兵衛が組合一統よりの見舞金を江戸の魯平に届けている。他方、分家側支持の動きを示す史料として史料2を掲げる。

史料2

乍恐以書付奉願上候

甲州道中日野宿助郷四拾三村之者共奉申上候。当宿御改革大惣代武州多摩郡蓮光寺村名主魯平義者至而心底惡敷も
の既ニ日野宿名主隼太彦右衛門^与同様惡意取巧、曾我豊後守様御勘定御奉行御勤役中魯平儀者忠右衛門^与申候節
御吟味筋身分御調有之被召出厳重御咎御座候處、弁舌を以品々申開致其上人物宜敷故欺穩便ニ相濟候得共、其節
鹿人躰之上多弁ニ無之候ハ、申訳難立筋合多分ニ御座候。且大惣代可勤身上向ニ者無之所如何之筋ニ大惣代ニ相成候
哉一円難相分、大惣代ニ相成候而村方惡心之もの手なづけ、其外太郎吉義者幼年之節日野宿伯父之相続人ニ相成、
同宿名主彦右衛門隼太方^江出入仕彦右衛門手先相勤公事訴訟相好、日雇賃^ニ而他人之出入も引請其日稼ニ仕、売掛之
帳調ニ相頼まれ貸主方ハ何程^与仕切ニ致非道ニ取立、先方^江睦々金子相渡不申私欲仕候。右之通惡心者故伯父之方離
縁ニ相成親元^江立戻居候内、原関戸村百姓茂左衛門娘魯平方ニ奉公中連出江戸表^ニ而をか引致候を、魯平義太郎吉者惡
心之者故身方ニ致度連戻年々金五兩ツゝ給金村方^与差出させ、御下知無之を^茂不差構、聊之義も太郎吉差遣^シ為縊魯
平宅^江引來取調、内々射礼申請差免し候義間々有之、其外少々之公事^ニ而茂兎角大造ニ仕成腰押致、直様可濟事も自
分立入候迄^者引延候而、程能時分立入相濟是又礼射申請候を商売同様ニ致、礼物無之もの^江者手先もの差遣^シ難題申掛

無駄ニ禮物申請、御用ハ勿論自分用共日野宿江罷出候節々多分酒喰之上かゴニ而上下致、右入用を四拾三ヶ村江割掛取立一同迷惑致候得共、人びん宜敷弁舌を以八州様江殊之外取入内舌仕候間、威光強右ニ恐口出シ仕候もの無之江戸表江も節々罷出兼而惡意可仕与発句を相好候と名付、府中宿助郷之ものニ而弥生庵を手なづけ四ッ谷住宅為致はいかへ宗匠ニ取立宝雪庵与改名為致、同人家江毎月兩三度ッ出府止宿何か内話致、是ハ重キ御役人中御家来様方江手続ヲ求置惡事相顯候節之手段と相見申候。其節御地所所様も魯平不正之廉々御取調被遊候ニ付、村方百姓共召出られ候數同人家百姓共江申勸メ四拾人程も御門訴為致自分不正をのがれへく取斗方ニ御座候。此節御吟味ニ相成候間打驚宝雪庵之内談間ニ合、同人家重キ御役人中様江体能申込取捨、宝雪庵も一旦世話請候身分ニ付所々欠廻リ取締候由ニ御座候。眼前不正与申義者御改革大惣代之もの者年々足しまへ仕相勤可申所、大惣代ニ相成候而も追々身上向立直家内中之着類も礼物ニ而間ニ合、魯平忤坏者日野宿増田屋之娘与馴染をり、五六日ニ而用向方付可申所七拾日余相掛、一日五匁ツ之貨銀四拾三ヶ村江割合取立、是以不正之筋与奉存候。此度御差出之一条ニ付、最寄府中并ニ日野宿料理茶屋はたごや懇意其外所々江太郎吉内婦村致宜敷風聞致具候様魯平と相頼同人申触、村方江も申談シ最寄親類とも所々江相頼申候。魯平太郎吉此伋婦住致候様ニ而者助郷村々者不申及日野宿商人一同難渋仕候。同宿隼太同様之ものニ付、可然御賢察敵重御取調被成下、幾重ニも此段御聞濟日野宿江永々立入不申候様いたし、助郷村々相かすめ不申候様、何卒御慈悲を以御憐愍之程奉願上候以上。

弘化二年

甲州道中日野宿

巳ノ八月

助郷四拾三ヶ村

御奉行所様

百姓共

史料2は、弘化二年八月付の日野宿助郷四三ヶ村百姓共（助郷組合村と改革組合村とはほぼ一致）から奉行所宛の

幕末維新期における村と地域（渡邊）

願書の下書である。そこでは、魯平が大惣代の地位を利用して不正を働き、府中宿や日野宿などで良い評判を広めようと策動していると訴えられている。ただし、この願書が実際に提出されたかどうかは不明である。この他にも分家側の史料には、魯平が大惣代の職権を利用して行った「悪行」の数々が書き上げられている。これがどこまで事実かは疑問であるが、しかしここから、大惣代とは自腹を切っても百姓共には余分な負担をかけてはならず、また職権を利用して私腹を肥やすような公私混同の行為をしてはならないものだという、百姓の立場からあるべき大惣代像を読み取ることができる。こうした公私を明確に区分して一般の百姓のために働くのが大惣代だという理念を基準として魯平に批判の矛先が向けられているのであり、このことは魯平の跡を継いで文久元（一八六一）年から大惣代となつた忠右衛門の行動にも影響を与えたのではなからうか。そこで、次節では忠右衛門の地域での活動を中心に検討したい。

2 幕末維新期の地域社会

本節では、前節での分析を踏まえて視野を地域社会にまで拡大し、幕末維新期における村と地域社会の相互関係について考えたい。具体的には、改革組合村単位の農兵設置と助郷組合の運営という二側面について検討する。

（1）農兵と村落・地域

多摩地方の幕領では、伊豆斐山代官江川英敏の建議により、文久三（一八六三）年以降農兵が取り立てられていた。この農兵は改革組合村を単位に設置されたが、日野宿組合の文久三年一〇月時点での取立予定人数は、農兵三九人、手代り三九人、計七八人であった。一方、同じく文久三年に、関東取締出役らは改革組合村を廻村して、組合村ごと

に竹槍・薦・棒・刃物などで武装して防衛に当たるよう指令し、無宿・博徒・悪党・浪人などは殺してもかまわず、後から届け出ればよいとした。森安彦氏は、これを組合村の武装化、組合村への戦闘(殺人)権の付与と評価されている。おそらくは、この改革組合村武装編成の延長線上に、遅くとも慶応二(一八六六)年以降、日野宿組合において農兵が設置されている。表3には、連光寺村の農兵の人数とその階層構成を、表4には日野宿組合における農兵数を示した。表3、4からわかるように、連光寺村で四二名、日野宿組合全体では一〇九〇名が農兵となっており、江川農兵とは桁違いの多さである。また、幕領ではなく旗本領である連光寺村の富沢忠右衛門が農兵組織の中心となっていること、私領からも農兵が差し出されていること、この農兵が史料によっては「取締警衛人足」、「非常駆付人足」などと表現され(もちろん「農兵」と表記された史料も数多い)、幕府からは正規の農兵とは認識されていなかった可能性があること、などから、日

幕末維新时期における村と地域(渡邊)

表3 連光寺村農兵階層構成表

	農 兵	幹部農兵	一般農兵	雑 兵
10 ~ 5	4 ^人	4 ^人	0 ^人	0 ^人
9 ~ 10	1	1	0	0
8 ~ 9	1	0	1	0
7 ~ 8	2	2	0	0
6 ~ 7	2	1	1	0
5 ~ 6	4	1	3	0
4 ~ 5	2	0	2	0
3 ~ 4	6	0	6	1
2 ~ 3	8	3	5	3
1 ~ 2	7	1	6	4
0.5 ~ 1	1	0	1	2
0.1 ~ 0.5	4	2	2	2
~ 0.1	0	0	0	0
0	0	0	0	0
計	42	15	27	12

富沢家文書中の農兵関係諸史料及び1140より作成。

表4 日野宿組合村々農兵一覽表

村名	村高	家数	農兵数	村名	村高	家数	農兵数
老番組				五番組			
郷地村	268.598	36	19	堀之内村	604.3167	83	37
柴崎村	1139.339	239	106	別所村	148.12	26	10
福嶋村	442.701	71	29	中野村	384.564	60	22
築地村	115.568	29	10	大塚村	399.361	71	22
中神村	475.571	95	42	六番組			
宮澤村	471.69	41	16	松木村	277.021	44	20
式番組				越野村	178.298	36	20
栗須村	336.822	85	20	大沢村	382.587	48	20
石川村	922.274	123	30	上柚木村	412.839	70	20
平村	45.4	12	5	下柚木村	402.874	69	15
日野新田	23.737	5	2	七番組			
豊田村	385.2338	80	38	和田村	366.986	40	13
三番組				百草村	301.8335	45	17
川辺堀之内村	188.361	37	12	落合村	412.6611	78	29
上田村	146.812	12	5	乞田村	358.973	59	25
萬願寺村	107.673	23	8	八番組			
宮村	118.22701	25	10	関戸村	585.623	79	30
下田村	151.441	25	8	貝取村	143.94665	40	15
新井村	155.023	31	13	寺方村	62.9381	19	6
石田村	156.392	15	5	一ノ宮村	358.388	37	10
四番組				中川原村			10
落川村	375.41115	37	14				
三沢村	267.498	42	12	連光寺村	272.658	82	41
高幡村	163.3	25	20	日野宿	2304.721	385	190
程久保村	50.235	23	13	計		2649	1090
平山村	461.489	92	42	富沢家文書1543、1937より作成			
平村	338.49	75	37				

野宿組合農兵は江川農兵とは別個の存在であり、慶応期の当地域では幕領江川農兵と御料私領を問わぬ組合村農兵との農兵の二重構造を考える必要がある。

次に、連光寺村における農兵の特徴を表3などにもとづきつつ、列挙しておきたい。①村内の四六％の家から農兵が出ており、中・下層からも多くの農兵が出ている。②幹部農兵は上層の比重が高く、鳶口を持つ雑兵は下層の比重が高い。だが、幹部のなかにも下層百姓はかなりいる。③農兵として行動中は苗字を名乗っている。ちなみに、江川農兵は苗字を許されていない。④村内の集落ごとに複数作られて年貢・村入用などの賦課・徴収の単位となっていた組が、連光寺村農兵組織の下部単位に転用され、組頭が農兵幹部になり、組下の者を指揮している。名主の富沢忠右衛門が総大将であることと合わせて、日常的な村落行政組織がそのまま農兵組織に利用されている。

次に、日野宿組合農兵の特徴を検討すると、次の諸点が指摘できる。①組合村々の総家数の約四割の家から農兵が出ている。②連光寺村の場合と同様、日常的な地域政治秩序である改革組合村の組織がそのまま農兵組織になっている。すなわち、改革組合村を単位に設けられた農兵隊は、その中が八つの番組に分けられているが、各番組は改革組合村の小組合と一致する。そして、そのうちの五く八番組（これが大組合に当たる）を大惣代たる富沢忠右衛門が指揮している。つまり、村―小組合―大組合―改革組合村という組合村の内部編成がそのまま農兵組織に転用されているのである。また、武州世直し一揆のような広域闘争に直面したときには、組合村相互の連携や持場分担が図られている。③富沢忠右衛門は、組合村々の武器購入の仲介や代金立て替えなどを行い、組合村農兵の編成に大きな役割を果たしている。④幕府役人の直接的指揮を受けないため、江川農兵のように地域外に動員されることもなく、主体的判断で地域防衛に当たることができる。

以上のことから、次の二点を指摘しておきたい。

(1) 多摩地域の農兵については、既に茂木陽一氏が蔵敷村組合の江川農兵の分析を行い、農兵のなかに自衛組織、郷土防衛組織としての性格を見いだしている。¹⁰⁾私は、農兵のなかに郷土防衛的要素をみようとする茂木氏の指摘には賛成であるが、これまで述べてきたところから郷土防衛的要素は江川農兵よりも日野宿組合農兵の方により濃厚に認められると考える。日野宿組合農兵は、幕府の改革組合村武装編成方針があつて初めてありえたものであり、幕府から完全に自由な行動を取り得るはずはなく、また武州世直し一揆を鎮圧する側に回ったことも紛れもない事実だが、他方地域の中・下層百姓まで含めて組織され、かなりの程度主体性をもって地域防衛・治安維持にあたっていたことも評価しておく必要がある。

(2) 次に、幕末期の農民の武装の仕方は彼らが住む村や地域のあり方と密接に関連していることが指摘できる。連光寺村の農兵は、天保→安政期の騒動を経て形成された小前百姓の意向が村運営に反映される体制を基礎として、中・下層も含めた村内の半数近い家から農兵を出すという、いわば村ぐるみ農兵ともいべきスタイルであつた。そして、連光寺村農兵の総大将は富沢忠右衛門がつとめた。既に述べたように、彼は今川家家臣の後裔であるという由緒をもち、天然理心流の剣術を学んでおり、武士的側面をもっていたが、村運営に当たっては在村型豪農工的に行動していた。そのため、農兵の組織にあたっても一般農民と遊離することはなかつたのである。ところが、同じく由緒を強調する豪農であっても、彼が村の中で占める位置により、その武装の仕方は全く異なつたものとなる。その好例として甲斐国山梨郡下井尻村依田家の場合を検討しよう。依田家は、一八世紀に入つて土地集積を進め、元禄一三(一七〇〇)年三八石余であつた持高が宝暦八(一七五八)年には五五六石余に増加する。しかし、一八世紀後半以降減少に転じ、明治元(一八六八)年には一一〇石余であり、幕末維新期にはその経営は停滞的であつた。その一方で、同家は一八世紀末以降武田「浪人」としての身分意識を強め、一般の百姓との差異を徹底的に意識するようにな

る。それは、一面からみれば、依田家が他の百姓から次第に遊離していく過程でもあったといえる。そして、依田家は慶応四（一八六八）年四月に他村の浪人、神官らと護国隊という草莽隊を結成したが、そこには下井尻村の百姓は一人も入っていない。次の史料⁴はその結成を訴えた志願書である。

史料³

（表紙）

「草莽志願書」

今般 天下御一変之折柄御親征被仰出、官軍御東向被為在候御義者重太之御時変^与深く奉恐察候。依^而者微少之私共是迄草莽^ニ生育仕候へ共、朝廷御尊奉之儀^者年来之志願^ニ付一同奮発決心仕 御国恩^ヲ可奉報御時世^ニ傍觀仕候^而者、年来執心之一事消滅仕候儀^ニ付、赤心徹底仕度候間、御官軍御供被仰付度懇願^ニ御座候。願之通御許容被成^下候ハ、国中之有志貴賤^ニ不拘人撰相募一隊^ヲ結ひ抽忠勤度奉存候間、何方へ御差向御座候共御沙汰次第出兵可仕候間、前段之趣其御筋^ハ被 仰達何卒御採用被成^下候様一同^而奉願上候。恐惶頓首謹言。

慶応四辰

三月廿六日

武藤藤太 印

依田熊弥太 印

（以下六名略）

副総督付

参謀方へ差上

幕末維新期における村と地域（渡邊）

史料4には草莽意識が強烈にみられ、そのうえ官軍に従軍して転戦することを望んでおり、村や地域の防衛という意識は希薄である。したがって、依田家は「草莽の志士」型としての性格が強い豪農だといえる。このように、同じく由緒をもつ豪農であっても、彼が村や地域の社会関係に占める位置の違いにより、武装の仕方も対照的なものとなるのである。さらに、在村型豪農Ⅱの場合には、青木美智男氏が分析した出羽国村山郡の豪農の事例のように、世直し状況に対処して自己の経営を防衛するための独自の階級的暴力装置としての農兵設置がなされたのである。⁽¹³⁾すなわち、豪農及び豪農を含む村や地域の在り方が農民武装の在り方を規定しているのであり、先に述べた豪農の三類型ごとに異なった武装の仕方をとるのである。

(2) 助郷組合

ここでは、米崎清実氏の仕事に依拠しつつ、助郷組合について述べたい。⁽¹⁴⁾甲州道中日野宿への助郷組合村は改革組合村とはほぼ一致し、そこから助郷惣代が選ばれていた。富沢忠右衛門は、文久二年に助郷惣代として他の四名と共に継立人馬の勤め方について日野宿問屋に掛け合っているが、その際は日野宿問屋の反論に対して、次のような返書を送っている。⁽¹⁵⁾

史料4

日野宿江一ト通返書之覚

掛合書御返答文末小村一統を守居候役人ニ者、万端之差別相訳間舗との御書取ニ候得共、高割ニ而入用取立候時者、大小之論ニ不拘義ニ付、大村用繁之事情得度致候迄者、何ヶ度も論可申、且片鄙遠郷之役人ニ至迄、信服不致者江権威を以押付ニ取計候事者、長立候者之所置ニ有之間舗哉ニ懸案、然上者再応も再々応も遂示談、大小遠近一致之上

ならてハ万端相決兼、依而^者日数も相延可申条左様御承知可被下候。尤高井戸・布田両宿問合之義^者致承知、当方
も承り合置可申候、以上。
(文久二)
戊三月

平九郎

忠右衛門

彦五郎
芳三郎 様

史料4のうち、「片鄙遠郷之役人ニ至迄、信服不致者^五権威を以押付ニ取計候事者、長立候者之所置ニ有之間鋪哉
ニ懸案、然上^者再応も再々応も遂示談、大小遠近一致之上ならてハ万端相決兼、依而^者日数も相延可申条左様御承知
可被下候」と記した部分からは、助郷村々の利害を代表する助郷惣代として、日野宿問屋に対して一步も引かない強
硬な姿勢がみてとれる。

次に、元治二（一八六五）年の「日メ会所規則書」を見てみたい。日メ会所とは、日野宿において助郷惣代が詰め
て執務する所である。

史料5

(表紙)

「日メ会所規則書」

一、助郷惣代会所出勤中心得方之事。

但、助郷惣代役之義^者村々之為筋專一ニ心掛、当番出勤中禁酒^者勿論昼夜共会所不明様詰合居、御先触之内疑敷
廉も有之候ハ、前後宿方^五罷越得と穿鑿致、問屋場ニ而不正之取計不相成様精々心掛、惣代方ニ而日メ帳別段
組立置可申事。

(略)

一、人馬遣方之事。

但、御定人馬宿方ニ而立払候後、助郷人馬遣ひ可申者勿論ニ候得共、御朱印・御証文之外者、実々無勘場合ニ無之候而者前後之遣方不致、都而問屋場を申掛候難題等ニ不屈様相心得可申事。

(略)

右之通今般助郷村々一同御相談之上御取極被成候九ヶ条之趣堅相守、会所詰合中正路ニ精勤可仕、若違乱之勤方致候ハ御差図次第退役可致候。依之日々惣代一同連印致置候処如件。

元治二丑年正月

上落川村

幸五郎印

石川村

午之助印

中野村

与兵衛印

関戸村

郡次郎印

史料5から、助郷惣代は「村々之為筋專一ニ心掛」けることを要求され、その職務内容も助郷村々の相談によって取り決められ、勤務に不正があった場合には助郷村々の「御差図次第退役可致」き存在であったことがわかる。そして、「都而問屋場を申掛候難題等ニ不屈様相心得可申事」とされていた。

すなわち、助郷村や助郷惣代が幕府によって設定され、幕府の要求する役を果す存在であることは間違いないとしても、助郷村々の側では助郷惣代に対してイニシアティブを確保し、彼らを通じて合理的な役の遂行と負担の軽減を図ったのであった。

以上の組合村農民と助郷組合についての検討から次のように言えよう。豪農層による地域運営には、地域の共通利害を代表する側面と、豪農層の階層的利害に基づく側面との両面があることは、従来から指摘されてきたし、私もそう思う。そのうえで、富沢本家のように、在村型豪農Ⅰとしての色合いが濃く、村方騒動において同家の地域運営のあり方を強く非難された経験をもつ豪農の場合には、村運営におけると同様、大惣代や助郷惣代としての地域運営においても、治安維持や役負担の軽減など地域の共通利害を代表する側面がより強く現れるのだと言えよう。

次に、武州世直し一揆について一言述べておきたい。¹⁹富沢忠右衛門の指揮する日野宿組合農民隊は、慶応二年の武州世直し一揆の際には、六月一六日に府中宿から援兵を頼まれて一〇〇名余が加勢に出掛け、他に玉川の川原の警備部隊や追々駆け付けた者も加えたと総勢五、六〇〇人余が動員されたが、直接一揆勢と交戦することはなかった（日野宿組合農民の別の一隊は一揆勢と交戦に及んでいる）。翌六月一七日には、綱島・溝口の両組合との間で、綱島・溝口両組合は玉川の大丸村より下筋の渡船場を防衛し、日野宿組合は玉川の一ノ宮渡船場より上筋を防衛するという組合村間の役割分担が成立している。

佐々木潤之介氏は、当地域に隣接する八王子周辺地域の動向について、武州世直し騒動勢がその近隣まで接近しても、そして多摩川原で日野農民隊等によってその騒動勢が踏みにじられても、ついにこれに呼応して立つことが出来なかった、とマイナスの評価を与えている。¹⁹確かに玉川南岸地域の動向により百姓同士闘い合い殺し合うという悲劇を生んだことは紛れもない事実だが、他方でこれまで見てきたように、当地域の百姓達は村方騒動や組合村騒動によ

って村や地域のあり方を変えようとして闘ってきたのも事実である。また、連光寺村では金子有合次第請戻しの質地慣行が行われており、それもあって百姓達は農民層分解の進行を阻止しつつ、養蚕などの商品生産を發展させようとしていたのである。こうした百姓達の生産と生活を守ろうとする努力があり、それが一定の成果を収めていたからこそ、一揆に立ち上がることがなかったのだという側面をも評価する必要があるのではなからうか。

第2章 幕末維新期の村落共同体と村請制村

1 村落共同体と村請制村―連光寺村の内部構造

第1章では、村方騒動から地域の問題に視野を広げて論じてきたが、本章では再び連光寺村に立ち戻って、第1章では漠然と村と述べてきたものの内部構造、なかならず村落共同体と村請制村との関係の具体相を明らかにすることを課題とする。なお、ここで言う村請制村とは、連光寺村を指す。また、共同体についてあらかじめ定義しておけば、①生産力の発展が相対的に低位の段階において、人々が物質的生産活動を行ううえで不可避的に取り結ぶ社会関係、②その集団の成員の社会的生活過程における多様な要求が、基本的にはその集団内部で全て充足されるような全体社会、③人々が自由意志によって形成するのではなく、彼らにとっては所与の前提として立ち現れるような社会集団、という三つの要件を満たすような集団を共同体とする。そして、私は①の点に関して、村落共同体の本質的契機は土地所有にあり、耕地をも含めた土地の共同所有機能こそが村落共同体の本質であると考えていることをあらかじめ述べておく。⁽²⁰⁾

さて、連光寺村は、図に示したように、本村・馬引沢・下川原・舟郷の四集落から構成されており、舟郷は「えた

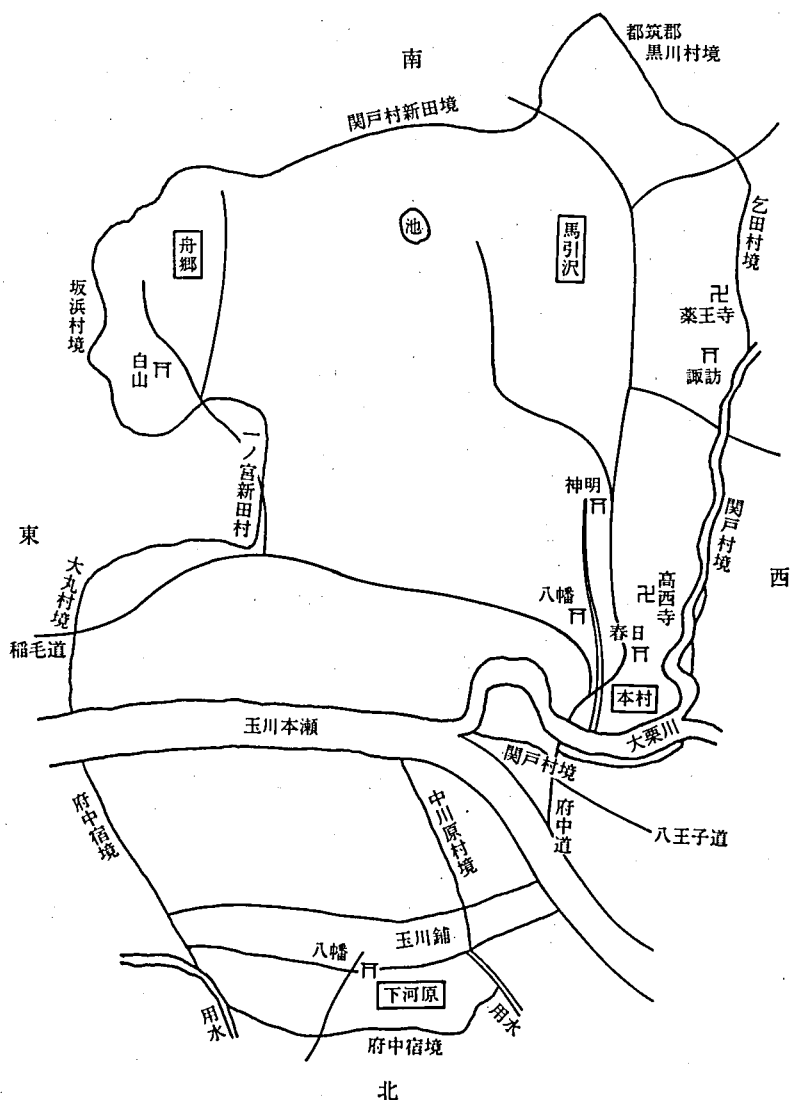


図 連光寺村絵図（明治2年）、註(1)天野論文より転載

村」である。また、この四集落のうち、下川原のみが玉川の北岸にある。もとは、下川原の集落も玉川南岸にあったのだが、寛保二（一七四二）年の洪水で家屋が流失し、それ以降北岸に集落を移したのである。次に、これら各集落の相互関係について、みていきたい。

（１）まず、土地所有についてみるために出入作関係を検討する。安政六（一八五九）年の連光寺村の出入作関係を見ると、他村からの入作地は二・五石程に過ぎない。明治二（一八六九）年においても他村からの入作は七名、計一九・七石余にとどまっており、これに対して他村への出作地は一四六・七石に及んでいる。ここから、①村民の土地所持が連光寺村の枠内で完結しておらず、しかも入作は増加傾向にあることと、②にもかかわらず、全体としては他村への土地流出が低く押えられていることが指摘できる。次に村内の各集落に目を向けると、下川原は五五石余、舟郷は一五石余と、それぞれ独自の耕地領域をもっている。下川原の出入作関係を見ると、安政六年の入作関係は、本村からの入作が三名、計九石余、村外からの入作が一名、一石余で、入作総計一〇石余（下川原分石高の一八％）である。これは、天保一四（一八四三）年の総入作高とはほとんど変わらない。出作については、明治二年には、他集落への出作はなく、北隣の府中宿・屋敷分村に三四石余出作している。すなわち、下川原も、連光寺村と同様に、他集落・他村との出入作関係はあるものの、基本的に下川原の耕地は下川原の住民が所持しているのである。舟郷の耕地も他集落・他村へはほとんど流出していない。

以上のことは、村高に比して家数が多いことによるのであろうが、他集落・他村への土地移動を防ぐに当たっては、金子有合次第請戻しの質地慣行や、屋敷地は質入れしないという慣行が存在したことが大きかったと思われる。

これが、明治一八年になると、村外からの入作者は、一四ヶ町村、二六名と大幅に増加している。

（２）次に、林野についてみると、入会地と百姓持山との二形態があり、さらに入会地には連光寺村持と本村など

集落持とがあつた。入会地からは、道や橋の普請の際に用材を伐り出したり、立木を売却して村の訴訟費用に宛てたりしていた。百姓持山は、大きく本村・馬引沢持山、下川原持山、舟郷持山の三区域に区分され、それぞれのなかを個人が分割して持っていた。

(3) 道路橋梁の保全については、時代が下るが明治二三年「多摩村連光寺区道路保護組合規約」⁽²⁾によれば、連光寺区内を本村、諏訪坂・馬引沢、下川原、舟ヶ台(＝舟郷)の四部に分けて、各部毎に受持区域を決めて行うことになつており、役員の選任や総会開催、経費負担なども各単位でなされた。ここから推して、幕末維新期においても道路橋梁の保全は基本的には集落単位に行われたと思われるが、一部材木代が連光寺村の村入用から支出されたり、用材が連光寺村の入会山から伐り出されることもあつた。また、文政七(一八二四)年の例だが、下川原の橋普請の時本村の者もその橋を利用するという理由で費用の一部を本村が負担している。

(4) 次に用水についてみると、本村は乞田川、川洞川から引水し、馬引沢は溜池と涌水を利用した馬引沢堀、下川原は四ッ谷・中川原両村と共同の用水路、舟郷は山間よりの涌水を利用、というように、各集落の用水系統はそれぞれ独立していた。そして、本村は乞田村と、下川原は四ッ谷・中川原両村とそれぞれ用水組合を作っており、下川原は用水については他村との関係の方が深かった。しかし、下川原は独立の村請制村ではないため、訴訟の際には本村の名主の署名を必要とした。

(5) 川除に関しては、玉川の洪水を蒙るのは北岸の下川原のみであり、下川原と他の集落とでは状況が全く異なっていた。下川原地先の玉川の川除普請は府中宿の定式御普請所であり、川除については府中宿との関わりが深かった。下川原でも自普請を行っていたが、安政六(一八五九)年の場合には、下川原が一〇両余を負担し、他に本村・馬引沢が三両、舟郷が四貫二〇〇文の見舞金を出している。

(6) 信仰については、本村に春日社、馬引沢に諏訪社、下川原に八幡宮、舟郷に白山社と各集落ごとに鎮守があり、各神社の氏子は各集落の住民だけで構成されていた。祭礼も別々の日に行われており、その費用も各集落の氏子が負担していた。また、本村に高西寺、馬引沢に薬王寺、下川原に川光院というように、舟郷を除く各集落に寺院があったが、明治六年に薬王寺、川光院両寺が廃寺になった際、寺附地所は連光寺村百姓惣持にする旨取り決められている。

(7) 明治一六年に本村の四二名が、婚礼・葬礼・家屋新築及び修繕・祭礼などについて取り決めた「議定書」⁽²²⁾を作成しており、ここから婚礼・葬礼・家普請などが集落ごとに行われていたことがわかる。実際には、コウジュー⁽²³⁾(講中)と呼ばれる集落内の小集団によって行われたのであろう。

以上七点にわたって村落共同体の諸機能の具体的なあり方をみてきたが、次に支配・行政の枠組について検討する。支配の基本的単位は言うまでもなく村請制村としての連光寺村であるが、各集落がその下部単位となっていることに注意する必要がある。村役人については、名主は本村の百姓が勤めるが、組頭(四く七名程度)・百姓代は本村・馬引沢・下川原からそれぞれ選ばれており、集落代表的性格をもっている。また、各集落はそれぞれいくつかの組に分かれており(ほぼ本村三組、馬引沢二組、下川原二く三組、舟郷一組である)、各組が年貢・村入用・御用金などの賦課徴収の単位になっている。ただ、鷹場役や玉川の御用帖上納役などの広域役負担は下川原が単独で負担の単位となっており、その場合には下川原村と呼ばれていた。

ここで以上の点を整理するならば、以下の二点が指摘できる。

(1) 村落共同体の本質的契機である土地所有については、連光寺村全体でみて、下川原、舟郷の各集落でみて、その耕地はほぼその構成員によって所持されていた。そして、耕地や山について、下川原や舟郷が独自の領域を

もつのに對し、本村と馬引沢の間には明確な境界線を引けない。その他の共同体諸機能をみると、道路橋梁の普請・用水・信仰・日常生活などは基本的には各集落が単位となっている。したがって、連光寺村において村落共同体の範圍を求めるなら、連光寺村Ⅱ村落共同体ではなく、下川原や舟郷が共同体なのだと言えよう。これに對して、本村と馬引沢の關係はより密接であり、両者が別個の共同体なのか、単一の共同体なのかは、にわかに決しがたい。また、下川原と舟郷はどちらも共同体であるといつても、その性格は決して同じではない。なぜなら、舟郷は幕末期二七軒前後の家がありながら耕地は一五石余しかなく、生産における農業の比重が下川原に比べて格段に小さかったからである。その分は、農業以外の諸産業でカヴァーしていたのであらう。このように、連光寺村を構成する四集落は、中心的な集落である本村、独立の共同体といつてよい下川原、相對的には本村と密接な關係をもつ馬引沢、共同体ではあるが他の集落とは性格を異にする舟郷、というようにそれぞれ固有の性格をもっていたのである。

(2) (1)で下川原が村落共同体であることを述べたが、それは完結した村落共同体であることを意味しない。それは、①他集落・他村と出入作關係をもっていること、②用水・川除で他の宿村と深い關係にあること、③連光寺村持の入会山があること、④他村との爭論や領主への訴願などの際には連光寺村が主体となること、⑤橋普請や川除普請の費用の一部を連光寺村の他集落が負担していること、などの点から明らかである。すなわち、共同体機能の一半は村請制村や組合村などによって分有されていたのである。

こうした村請制村と村落共同体との關係は、從來の研究史ではどのように説明されてきただらうか。從來の歴史研究者の一般的な理解は、生産・生活の単位としての村落共同体が村請制によつて領主支配の末端として編成されたとするものであり、村請制村と共同体とは同じものの二つの側面である⁽²⁴⁾とみなされてきた。これに對して、福田アジオ氏は、安易に村請制村Ⅱ村落共同体とする見方を批判して、村請制村のなかには複数の集落があるのが普通であり、

前者が支配単位としての村で、後者が生産と生活の組織としてのムラであるとして、両者を区別すべきことを主張している。⁽²⁵⁾

しかし、これまでの連光寺村の分析は、この議論のどちらにも問題があることを示している。すなわち、第一に、村請制村Ⅱ村落共同体とは必ずしも言えないということであり、その点では福田氏の指摘は当たっている。しかし、第二に、村請制村は支配の村、その中の集落は共同体というふうに単純に言い切るのも問題である。なぜなら、共同体機能の一部は村請制村や組合村などの諸集団によっても分有されており、また本村と馬引沢の場合のように集落が別だからといって即別個の共同体とはいえない場合もあるからである。したがって、共同体を論じる際には、村請制村やそのなかの集落をア・ブリオリに共同体とするのではなく、土地所有を基軸とした共同体諸機能が基本的にどの集団によって担われているかを慎重に検討しなければならないのである。

他方、村請制村についてみると、村請制の単位は連光寺村だが、御用鮎上納役や鷹場役は下川原に賦課され、年貢・村入用の賦課徴収は各集落の中の組を単位に行われている。したがって、村請制村のみが支配・行政の単位なのではなく、その中の集落も支配・行政単位としての機能をもっているのである。

2 下川原の分村運動

前節では村請制村と共同体との関係を構造的に分析したが、本節ではそれを受けて、幕末維新期における村落共同体の動向をダイナミックにとらえてみたい。具体的には、一九世紀に繰り返し試みられた下川原の分村運動を取り上げる。

第1章で取り上げた村方騒動のなかで、弘化二（一八四五）年に本家側から出された訴状の一節には次のように書

かれています。

史料 6⁽²⁶⁾

(前略)

……勝太夫義村内下^モ 川原組頭弥五郎ハ身元宜敷同人^江名主役可申付由^ニ而、同所百姓三拾軒余村分ケ致候由^ニ而引分ケ、農事助合雜用出銭等差押ヘ義理立候者^者銘々呼出し咎可申付旨弥五郎^江申付置連印取置せ候由^ニ而、弥少人数相成候……

(後略)

史料 6 やその他の史料から、地頭所用人加藤勝太夫が村方の結束を切り崩すため、下川原に対して分村を認める代わりに富沢分家側を支持するよう求め、下川原の組頭弥五郎を名主代にしていることがわかる。そのため、下川原の百姓達は同年六月の門訴にも参加せず、百姓達が江戸出府中の農作業への助力や雑用金の支出にも応じておらず、本家側にとっては痛手となっている。しかし、結局分村は実現しなかった。

次に分村運動が起こるのは明治元(一八六八)年である。同年、玉川を境に北は品川県、南は神奈川県の管轄となつた。これを機に、下川原では組頭幾太郎を中心に品川県へ分村を出願し、許可のおりる前に、同年一〇月幾太郎の屋敷前に新しく高札を設置し、他に「下川原村」と記した傍示杭を建ててしまった。特に、高札については、独立村のシンボルとして以後もあくまでも固執している。これに対する本村側の反論を次に掲げる。

史料 7⁽²⁷⁾

(表紙)

——当村内下川原一件書類

幕末維新期における村と地域(渡邊)

連光寺村

名主

忠右衛門

乍恐以書付奉願上候

当県御支配所武州多摩郡連光寺村役人惣代名主忠右衛門奉申上候。当村之義者慶長三年御繩入之節私先祖修理与申者御檢地御案内相勤老村老給_ニ而御料所_ニ御座候処、寛永年中元地頭天野家_江御拝領_ニ相成其後宝曆三年地頭_ハ地押有之干今右地押帳を以地方取扱来り御水帳_者勿論御割附共所持罷在、慶長以来引統十代余名主役相勤来り候。然処今般御当県十里部内西_者酒勾川東六郷川筋通り御支配所_ニ相成候段被仰出、既_ニ十月上旬御用定役中林惣兵衛様同中村民五郎様并_ニ支配御勘定石賀新五郎様御普請役様方御見分_与して寄場日野宿_江御出役被成、組合村々高反別米永家数人別其外御取調之節、玉川添村々之義_者御境界之場所_ニ付別段絵図面差上候様被仰付、但玉川南_ニ元村有之村方_者玉川北_ニ地先飛地等有之候共不殘境界内_与相心得可申段被仰渡奉畏、絵図面印形仕差上置候義之处、村内字下川原_与唱往古_者玉川南_ニ元屋鋪有之候処、中古玉川変瀬致候_ニ付当時_者玉川北_ニ相成候場所当村五分一程有之先前組頭兩人取立置候内老人_者身持不宜_ニ付去_ル亥年中元地頭_ハ休役被申付当時_者組頭幾太郎_与申者老人_ニ御座候処、今般玉川境御支配違_ニ相成候由承り自立之志_を起_シ村分々致名主_ニ可相成巧を以神奈川県支配_ニ相成候義難決之由其外自儘不取留義共申立、知県事古賀一平様御役所_江出願致既_ニ当十月中右幾太郎宅前_江新規御高札を補理村分々御聞済_ニ相成以来下川原村_与唱古賀一平様御支配請神奈川県支配_者不請旨申触候段承り候_ニ付、村方役人_者不及申小前百姓一同驚入候間幾太郎呼寄可承り糺_与存度々申遣候処、古賀様御用_ニ而出府中之趣申答不參故事柄相分り兼候得共、新規村分ハ不

容易義ニ付全右御役所ニ而御聞濟ニ相成候ハ、元村名主役人共方江御沙汰可有之筈之義ニ而、殊ニ幾太郎義下役組頭ニ乍有之名主并ニ外役人共ニ不存ニ何等之御用ニ而知県事御役所江罷出府中ニ候哉旁不得其意義ニ而、若村分ケニ相成候而者、基々小高之村方ニ候処尚亦小村ニ相成百姓一同難渋仕候義ニ付、今般新規ニ補理候御高札小前一同押掛取払申度趣申出候得共、御一新之御時節荒立候義仕出シ候而者不相濟旨篤ク申諭取鎮置村役人古賀様御役所江此段書面を以御伺申上候得共今以何之御沙汰ニ無之、然処今般弥 当県御支配所ニ相成候ニ付御收納向者勿論公事出入御吟味物其外諸御願御届等当御裁判所江御訴可奉申上旨御触達御座候ニ付、幾太郎方江右之段申達候得共何分当県御支配請候義者不承知之趣ニ而、人別并当辰御收納米永上納難致段申答候ニ付、差当御年貢取立方ニ差支先年右下川原ニおゐて心得違之組頭有之地頭用人を取拵村分ケ相目論見高札体之物補理候義有之候処元村ニ故障申立候ニ付直様為取払候義御座候処、其砌之札板を隱置往古々老村立之証拠ニ申立古賀一平様御役所江書面差出候由ニ御座候得共、基々当村老村老給ニ付式ケ所之御高札可有之謂無御座、且又往古別村之由ニ申立候趣ニ承リ候得共、慶長以来御水帳御割附等ニ而顯然相分リ候義、然ルを右体隱置候古札を基礎ニいたし願書差出新規御高札取建候段甚以不当至極之所業差当御年貢上納方差支旁片時ニ難捨置義ニ付、此段御訴奉申上候。何卒以 御威光右幾太郎被召出前書之始末嚴重御糺之上新規御高札之義者速ニ取払被仰付、向後右体之企不仕様新古共札板者元村江御引渡被成下、旧来仕来リ之通老村老給ニ相成御年貢米永其外共元村名主方江取立上納仕当県御支配奉請候様被 仰付、村方百姓一同安心仕候様 御仁恤之御沙汰奉願上候以上。

御支配所

武蔵国多摩郡

明治元辰年十一月廿七日

連光寺村

幕末維新期における村と地域（渡邊）

役人惣代

名主

忠右衛門

神奈川県

御裁判所

本村側は、分村ということになれば、もともと小高の村がなお小さくなり、百姓一同が難渋するという理由で、名主の富沢忠右衛門を先頭に立てて反対している。ここには、村請制村は一定程度大きくなければならないとする主張が見てとれる。また、小前一同も新規の高札を押し掛けて取り払いたいと主張しており、集落ぐるみの反対であることがわかる。さらに、下川原側は、以前の分村運動の時に建てた高札板を分村運動失敗後も捨てずに取って置き、明治元年に至って近世から一村立だったことの証拠として持ち出している。ここに、分村に賭ける下川原の長年の執念を見る思いがする。

この一件は、明治二年正月内済となるが、近世を通じて下川原が連光寺村の枝郷であったことは紛れもないため、本村側の主張が認められ、以前の分村運動の時建てた高札板は神奈川県へ提出、今回新規に建てた高札板は焼き捨てと決まった。

次に分村運動が起こるのは明治十一年である。この時は、明治元年の分村運動で中心となった高野幾太郎が、連光寺村を離れて北に隣接する府中駅への合併を求めて出訴した。このときの、下川原側の主張を史料8に示した。

史料8⁽²⁸⁾

以書付奉願上候

当県第八大区八小区

武蔵国多摩郡連光寺村

字下川原

(略)

右字下川原人民総代高野弥五左衛門病氣ニ付同人父高野幾太郎奉申上候。私共住居下モ川原之義連光寺村飛地与唱同村江附屬罷在候得共、諸事不便ニ付明治十年十一月内務省乙第四百四号御布達ニ基キ第十大区四小区府中駅江合併仕度双方江熟談及候処、府中駅ニ而者承諾相成候得共連光寺村ニ而不服故障申張熟和合併不相成難決之廉左ニ奉申上候。

第一

一本村与称スル連光寺村者玉川南ニアリテ下モ河原ハ北ニシテ別紙餽画図面之通り府中駅ノ地ニ孕リ居リ、連光村江者玉川ヲ打越凡距里三十町余有之ニ付時々御布告御布達モ遠方自然遷延及玉川洪水之砌リハ日数ヲ不論薄水相成候迄ハ更ニ通行不出來候ニ付、公務村用共差支ル事屢有之、依而通常村費之外臨時費用相嵩甚タ難決罷在候事。

第二

一下モ河原之義玉川附ニ而上者中河原村境与リ府中駅江人家耕地共悉入会罷在地畝御普請所ハ府中駅之持場ニ而当村之自由ヲ不得自普請致候而巳小高之窮民自力ニ不及下モ河原人民之内高野五左衛門外九名之者宅地流失人ノ内三名ハ宅地出來仕候得共、相殘而七名之者今以元形ニ不立戻借地罷在候得共、本村連光寺村ニ而者聊タリテ助成致吳不申、然ニ同村江掛リタル村費区費ハ勿論道普請費用モ高割ヲ以多分ニ取立甚タ難決罷在候事。

第三

一該地下モ河原戸数三拾三戸之人民凡貳百名余有之旧持高田畑山林合僅五十石余年々出水之砌流失致、残田畑合改

正町步漸八町斗有之百姓相統營兼候ニ付、府中駅所有之田畑八十町余從來小作致助命罷在リ、同駅年來之厚恩、請候義不少、其上川除御普請等之修繕者悉皆府中駅ニ仕来候義ニ而、右駅無之候ハ、何ヲ以テ家名相統可仕哉、此段御賢察奉願上候。

(略)

第五

一学校資本金百五拾円本村江差出候義ニ而元金額ハ自方江積置月々利子ニ而巳為差遣置候得共、遠隔之義幼年之生徒中河原関戸兩村渡船平水之節者渡船賃老人前金貳厘五毛ヲ金三厘五毛ツ、水増ニ相成候節ハ次第ニ高価之船賃差出シ日々出錢積レハ山ニ相成候義、費用多端積其上山谷蔽窟打越生徒往復差支相成、資本新築費ハ本村江差出入費難波之中不得止府中校之枝校字分梅校江手近ニ付、同校江依頼シ生徒差出候ニ付是以元費相嵩重々難波罷在リ、右ニ準シ諸般ノ費用相嵩シ是亦御賢察奉願上候。

前條之次第ニ付、此上連光寺村江附屬致居候ニ而飛地遠隔故継子同様之取扱被致、諸入費相掛下モ河原三拾三戸人民可行立様無御座殆難決仕候間、何卒前頭之次第被為聞召訳明治十一年十一月内務省乙第四百号御布達ニ基キ連光寺村ノ離レ府中駅江合併被仰付度、此段以連署奉懇願候以上。

右下モ河原

連名印

高野弥五左衛門病氣ニ付

父高野幾太郎

下川原が連光寺村からの分離を求める理由は、一言で言えば「諸事不便」ということだが、具体的には次の諸点で

ある。①本村とは玉川を隔てて遠いので、布告布達の廻達が遅れるなど「公務村用共」しばしば差し支え、費用も嵩む。②下川原の者が玉川の洪水で宅地を流失しても、本村からはいささかの助成もしてくれない。③下川原住民の所有地は八町ほどしかなく、府中駅の土地八〇町余を小作することで経営が成り立ってきた。また、下川原地先の川除御普請も全て府中駅で行ってきた。このように府中駅と下川原とは非常に深い関係にある。④連光寺村の小学校は遠いし、玉川の渡し賃も嵩むので、生徒は手近の府中校分校に通学しているが、学校資本金だけは本村へ差し出さなければならぬ。以上の四点をあげて、この上連光寺村に付属していても「飛地遠隔故継子同様之取扱被致、諸入費相掛」り難渋であると主張している。

これに対する本村側の反論の主旨は以下の通りである。①玉川の横断に関しては、冬春は橋をかけ、夏秋は渡船があり、いささかも差し支えなく、「公務村用共」滞りなく行き届き余分な費用もかからない。②安政六年の洪水の際には本村より人足を出し、さらに富沢政恕（忠右衛門）は所持地一反余を時価の十分の一の値段で宅地を流失した者に売却して救済したのに、幾太郎ら下川原の有力農民はいっさいそのようなことをしていない。③下川原住民の所有地は一二町六反余あり、他方府中駅への出作地は約一〇町、小作地は約二〇町に過ぎない。④小学校への通学の際玉川を渡るには、橋や渡船があつて何の支障もないのに、下川原では無許可で生徒を府中校分校に通わせている。以上の点を述べた上で、連光寺村は小村なので、この上下川原が分村しては「一村之事務難相立」と主張している。

この一件は、翌明治一二年三月に内済になったが、その際、①本村と下川原との交通は夏秋は渡船、冬春は仮橋で行い、橋を架ける際の入費は以来全村で負担する、②下川原地先の玉川の堤防は府中駅の定式御普請所だが、もし今後下川原も出金するような場合には全村で負担する、③府中校分校へ通学していた下川原の生徒は以後もそのままとし、また学校資本金の内下川原の出金分は今月限り廃止する、という各項目が合意され、これからは下川原住民にと

って不便はないので、以後は分村の請願は行わないこととされている。

以上が一九世紀における下川原の分村運動の始終であるが、ここから以下の諸点が指摘できる。

(1) 分村というときの「村」とは村落共同体ではなく行政村(以下の行論は村請制の廃止前後にまたがるため、繁雑さを避けて村請制村を指す場合も全て行政村と仮に呼んでおく)であり、分村運動とは、行政村の分割を求める運動だということである。このことは先に指摘した高札の設置Ⅱ分村の達成という認識のうちにみてとることができるし、また分村が常に領主や地方権力の承認を不可欠としていることからとも言えることである。そして、分村を望む理由は、(行政村運営の中心である本村から玉川を隔てて離れているため、諸事不便で費用も余計にかかる)ところにある。

(2) 明治元年までの分村運動は、行政村の範囲を下川原という村落共同体の範囲に一致させることを目指していたということが指摘できる。表1からわかるように、下川原内部にも所持石高における階層差は存在したが、分村に關しては共同体として一体となつて運動した。すなわち、村落共同体は、次第にその機能を分化・拡散させつつも、明治元年頃までは構成員の結集核としての役割を保持し続けたといえる。ところで、ここでひとつ問題となるのは、明治〇年代には全国の町村数は約一万減少しており、この時期には分村より合村の方が主要な動向であつたことをどう考えるかである。しかし、この時期の合村のなかには本来一村であつたものが近世において領主支配との關係で分裂させられていたものが合併したケースが多く存在している。³⁰ こうした合村は、行政村の範囲を共同体の範囲に一致させようとしている点で分村と本質的に共通しており、こうした合村が多かつたことは、この時期共同体が構成員の結集核たりえていたことの一つの例証となろう。

(3) しかし、明治一〜二二年の分村運動は、それまでのように独立の行政村化を目指すのではなく、府中駅と

の合併を求めているところに特徴がある。これは、当時の町村合併の趨勢にもよるのだろうが、同時に村落共同体の解体が進行し、出入作をはじめ府中駅との結び付きが深まったことの現れなのではなからうか。このことは、明治二年の府中宿（屋敷分村を含む）への出作が三四石余なのに対し、明治一年には内輪に見積もった可能性もある本村側の主張においてさえ約一〇町に及んでいることで裏付けられる。

以上の検討から、幕末維新期の村落共同体の変容については、次のように言うことができよう。共同体は、出入作関係の拡大にみられる共同所持機能の低下や共同体諸機能の諸集団への分有などからわかるように、解体過程に入っていたが、明治に至るまでなお構成員の結集核としての積極的役割を失ってはいなかった。そして、直接生産者の多くは、共同体に依拠して、自己の所持地を確保しつつ徐々に商品生産を発展させるなど、自らの生産・生活の維持・改善を目指していたのであり、共同体を進んで否定する必要は毫もなかったのである。^{①)}しかし、地租改正と明治五年の地所質入書入規則をはじめとする一連の土地関係諸法令により近代的地所有権が法認され、村落共同体による間接的共同所持機能が否定されたことは、共同体の解体過程を上から強行的に促進した。^{②)}このことは、この時期を境に出入作関係が大きく進展したことから明らかである。

佐々木潤之介氏は、幕末期の村方騒動について、それは村共同体の否定ではなく、村共同体の再編運動だったのだと評価しており、私はこの評価には賛成である。しかし、佐々木氏が他方で、村共同体は否定されなければならず、「半プロ層」の村方騒動に果す役割が増大することによりその可能性が強まっていく、としている点は疑問である。^{③)}なぜなら、共同体の解体とは、「半プロ」層が村方騒動を通じて自覚的に行うようなものではなく、①農民層分解の結果、主体的か否かは別として共同体を離れて他所に移住する者が増加すること、②そして他方で在村型豪農Ⅱが共同体の変質・解体を意に介さず自己の経営拡大を進めること、などによって徐々に進み、それが明治政府の私的土地

所有權法認政策によつて一挙に進行したのである。①の点を連光寺村について史料をあげて具体的にみよう。史料9は、弘化二年八月の旗本天野源左衛門の幕府に対する申立書の一節である。

史料9

一、百姓太郎吉儀^者魯平分家^ニ而候間、同人腹心之者^ニ而手先^ヲいたし万事召仕同様ニ仕置、田畑も所持不仕故、賃銀を取^レ候而公事出入之惣代を好、又^者博奕等仕魯平之手先之事ゆへ權威を以百姓共難儀為仕惡事を工候もの^ニ御座候。若村方住居も難相成義出来候^而も田畑も所持不仕候間、さして差支無御座、右様之節^者行末魯平世話仕候由^ニ承り及候事。

ここでは、天保く安政期の村方騒動の際本家側について活躍した太郎吉という百姓について述べられているが、彼は田畑を所持しないため、村方に住めなくなつてもさして差し支えない者として領主に認識されている。実際、史料2から、彼が日野や江戸に居住した経験があることがわかる。このように農業や土地や共同体から自由になつてつある者が出現していること、さらに明治二年に全戸数の一％に当たる九軒の潰百姓が存在していたこと、などが共同体解体の進行を示す徴表として指摘できる。

おわりに

以上、本稿では、意識的に一村分析に徹して、連光寺村に絞つて多様な問題なるべく幅広く取り上げることにより、幕末維新期の村と地域の具体像を明らかにするという方法をとつた。以上の検討結果を世直し状況論との関連でまとめると、次の通りである。①豪農論については、佐々木氏の経済的側面での豪農規定を前提としつつ、その政治

的行動の面では類型化が必要であることを述べた。②「半プロ」論については、「半プロ」という小農とは異なる階層の出現に注目した点を継承しつつ、彼らが騒動を通じて共同体を否定する可能性をもったとする評価を批判して、土地・農業・共同体などから自由な彼らの存在自体が即目的に共同体を解体に導く因子となったのだと述べた。③共同体論については、村請制村と共同体とを一体視する見方を批判して、さらに幕末維新期の共同体は解体過程にありつつもまだ成員の結集核としての積極的役割を失っていないかったことを述べた。私は、このように考えることによって、世直し状況論を批判的に継承することができるのではないかということを述べたつもりである。

最後に、村請制村の変容について若干述べて結びに代えたい。幕末維新期には、村方騒動や分村運動により、村請制村が動揺していたことは間違いない。小前層は、村方騒動により村運営への参加度を拡大し、村役人の恣意を制肘して彼に在村型豪農I的な行動をとらしめ、それを通じて領主の収奪を抑制していこうとした。すなわち、村請制村を支配の単位から「行政」単位へと変えていこうとしたのである。また、分村運動は、村請制村の範囲を自分達に適合的なものに変えようとするものであった。そして、両者に共通するのは、村請制村の範囲と運営形態を枝郷百姓や小前層などの「弱者」が暮らしやすいものに変更しようとした点である。したがって、従来から指摘されてきた村請制の動揺とは、決してその否定を目指す運動による動揺ではなく、その変革を目指す過程での動揺だったのである。そして、明治政府は、三新法体制期までは、基本的に近世の村請制村を最末端の行政単位として位置付けつつ、戸長の官吏化と村内への公私分離の持ち込みを図ったが、それが実質的にどこまで成功したかは、幕末期における村請制村の変革の達成度によって規定されることとなったのである。

〔註〕

(1) 連光寺村に関する先行研究としては、安澤秀一『近世村落形成の基礎構造』(吉川弘文館、一九七二)、安澤みね「元禄・享保期における一旗本の入用金調達仕法」(関東学院短期大学『短大論叢』一四、一九五九)、同「近世後期武家家計の一考察」(『神戸女学院大学論集』一三二、一九六六)、同「近世後期における百姓分散について」(『三田学会雑誌』六四一八、一九七二)、同「近世後期における農民金融」(『近代経済の歴史的基盤』、ミネルヴァ書房、一九七七、所収)、同「近世後期における農民金融の展開」(『神戸女学院大学論集』二六―三、一九八〇)、仙石鶴義「近世後期旗本家政改革と御勝手向賄名主役の任用をめぐる」(『法政史学』二五、一九七三)、同「旗本家政の展開と知行所支配の変質について」(『法政史論』五、一九七八)、柳田和久「関東における農村構造の変質と文政改革」(『法政史学』三〇、一九七八)、青木直己「江戸廻りにおける鷹野支配と「領」」(『立正史学』五八、一九八五)、福田アジオ「近世前期南関東における家の成立と地親類」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一一、一九八六)、渡辺実「未解放部落史の研究」(吉川弘文館、一九六五)、塚田孝「近世における賤民身分の人別帳に関するノート」(『日本近世史論叢』下、吉川弘文館、一九八四)、外山徹「近世前期玉川流域における鮎「上納」に關

する一考察」(『関東近世史研究』二九、一九九〇)、紫芝昌子「香奠帳についての一考察」(『地方史研究』二三四、一九九二)、岩橋清美「近世多摩地域における「旧記」と「郷土」」(『法政大学大学院紀要』二九、一九九二)などがある。また、私が知り得た限りの未発表論文として、岩橋清美「近世後期における治安維持と村落」(『法政大学修士論文』)、紫芝昌子「近世村落における贈答慣行に関する研究」(『国学院大学修士論文』、天野裕明「近世幕末期旗本領における村方騒動の研究」(『東京学芸大学卒業論文』)がある。天野氏には論文を閲覧させていただき、岩橋、紫芝両氏にも種々御教示いただいた。記して謝意を表したい。

(2) 後述するように、連光寺村は四つの集落から成っていたが、ここにあげた家数八二軒、人口六六五人のなかには、舟郷集落の分が含まれていない。

(3) 富沢家文書、富沢分家文書とも、『史料館所蔵史料目録』第六集(一九五七)として目録が刊行されている。

(4) 佐々木潤之介「世直し」(岩波書店、一九七九)三四ページなど。

(5) 拙稿「幕末・維新时期における農民と村落共同体」(『歴史評論』四七五、一九八七)。

(6) 富沢家文書五三一。

(7) 富沢分家文書一四五。

(8) 森安彦「文政改革と関東農村」(『歴史手帖』一〇一六、

一九八二。

(9) 連光寺村および日野宿組合農兵については、註(1)岩橋修士論文が扱っている。

(10) 茂木陽一「幕末期幕領農兵組織の成立と展開」(『歴史学研究』四六四、一九七九)。

(11) 依田家については、藤村潤一郎「近世中期における地主経営の実態」(『史学雑誌』六八一四、一九五九)、同「天保甲州郡内騒動の諸側面」(『史料館研究紀要』二、一九六九)、山本英二「浪人・由緒・偽文書・苗字帯刀」(『関東近世史研究』二八、一九九〇)、同「甲斐国「浪人」の意識と行動」(『歴史学研究』六一三、一九九〇)などを参照。

(12) 依田家文書(国立史料館所蔵) 一二一九。

(13) 青木美智男「幕末における農民闘争と農兵制」(『日本史研究』九七、一九六八)。

(14) 米崎清実「武蔵国多摩郡日野宿組合村における助郷惣代制について」(『新立川市史研究』五、一九八九)。

(15) 富沢家文書一八六四。

(16) 富沢家文書一八八一。

(17) 貝塚和実「近世地域社会の構造と変容」(『歴史学研究』六二六、一九九一)など。

(18) 富沢家文書二〇四九―二三。

(19) 佐々木潤之介「幕末社会論」(塙書房、一九六九) 二二

九ページ。

(20) 以上の共同体の理解については、拙稿「近世村落共同体に関する一考察」(『歴史評論』四五一、一九八七)、同「近世村落共同体をどうとらえるか」(歴史科学協議会編『歴史における家族と共同体』、一九九二、所収)を参照。

(21) 富沢分家文書一七八。

(22) 富沢家文書二二三九。

(23) コウジュウについては、多摩市史叢書(一)「多摩市の民俗(社会生活)」(多摩市、一九八九)および紫芝昌子「近世村落における贈答慣行に関する研究」で述べられている。

(24) 佐々木潤之介氏もこうした理解を前提としている(『幕末社会論』五五ページ)。なお、歴史研究者の中にも、木村礎氏をはじめ村内小地域に注目してきた方はいるが、その数は少ない。

(25) 福田アジオ「近世村落の景観と社会組織」(『歴史と地理』四二四、一九九〇)。

(26) 富沢家文書五一五。

(27) 富沢家文書一九三八―六。

(28) 富沢家文書一九三八―二二。

(29) 共同体機能の分化・拡散、および共同体の解体の理解については、中村吉治「日本の村落共同体」(ジャパン・パブリッシャーズ、一九七七)から多くを学んでいる。

- (30) 奥村弘「三新法体制の歴史的位置」(『日本史研究』二九〇、一九八六)三一ページ。
- (31) 落合延孝「世直しと村落共同体」(『歴史学研究』一九八二年度大会報告別冊特集号)、拙稿「幕末維新时期村落論への視角」(『論集きんせい』一四、一九九二)。
- (32) 丹羽邦男「土地問題の起源」(平凡社、一九八九)。
- (33) 佐々木「幕末社会論」六一ページ、同「世直し」四四ページ。なお、佐々木氏の半プロ論についての私の批判は、拙稿「幕末維新时期村落論への視角」で述べてある。私は、佐々木氏の言う「半プロ」を、小生産者・「半・前期プロ」・前期プロの三者に分けて理解している。
- (34) 富沢家文書一〇九三一〇。

(付記1) 本稿は、一九九二年度歴史学研究会大会近世史部会での報告「幕末維新时期における村と地域」をもとに成稿したものである。この報告の内容については、既に『歴史学研究』六三八号(一九九二年)に発表したが、そこでは紙幅の制約から、史料や註などかなり削らざるをえなかった。そこで、本稿は、前稿で省略した史料や註を加え、本文も加筆したものである。したがって、本稿の主要部分は前稿と重複していることをお断りしておきたい。

(付記2) 本稿の基礎となった歴史学研究会大会報告については、既に茂木陽一氏から御批判をいただいている(『歴史学研究』六四〇、一九九二)。氏の批判の要旨は以下の四点である。①渡邊による豪農の類型化は異なるレベルのものを同一平面上に並べたものであり成立しない。②渡邊は半プロの即目的存在が共同体を解体させると言うが、それは全く論証されていない。③渡邊は「村請制」村が支配の単位から「行政」単位へ変化していくというが、その意味合いがわからない。④連光寺村が舟郷という部落を含むことで、それぞれの動向がどのように「地域」の動向に関連するののかという点が解明されなかった。

これらの点について、若干の私見を述べたい。まず、①について。私は、豪農の類型化を、彼の村や地域運営に対する考え方と行動を基準におこなっている。つまり、彼が自らのイエを村や地域内で安定的に永続させるために、い

かに考え行動したかということである。その際、あくまで村や地域の内部での諸施策によって矛盾を克服しようとしたか、それとも村や地域の外に出て活躍することによって活路を見いだそうとしたかによって、在村型豪農と「草莽の志士」型との区分が生じる。次に、前者のなかでも、村や地域全体の再建のなかで自らの経営発展を図ろうとするか、自らの経営発展を第一義とし村や地域全体の問題は軽視するかによって、在村型豪農Ⅰと在村型豪農Ⅱが区分されるのである。すなわち、在村型豪農ⅠとⅡの区分は、茂木氏の言う「小農民への吸着の差異からする経営レベルの区分」と密接に関連しつつも、それを第一義的な基準とする区分ではない。世直し状況論批判の重要な論点のひとつが、豪農の経済的特徴からストレートにその政治的行動を導き出している点に向けられていることに鑑み、私は豪農の類型化をまずもって彼の思想と行動を基準に行い、次に彼のそうした思想と行動を奥深いところで規定している経済的要因をも合わせ検討しようとしているのである。したがって、私は豪農の類型化を同一基準のもとに行っているつもりであり、この点に関する茂木氏の批判は当たっていないように思う。

また、農民の武装についていえば、私は「幕末期の農民の武装の仕方」を問題にしているものであり、茂木氏の言う「在村武装力」のみを問題にしているのではない。そして、この場合でも、村や地域内での活動のみでは自己の安定的地位を維持できない「草莽の志士」型豪農は、武装するにあたっては官軍に従軍して各地を転戦するなかで武功をあげることにによって自らの政治的地位を強化しようとするのであり、村や地域外での活動に活路を見いだそうとしている点は一貫しているのである。したがって、農民武装の在り方の差異はやはり豪農の三類型に対応していると言えるのではなからうか。

②の点について。私は佐々木潤之介氏による「半プロ」の「発見」は非常に大きな意味をもつと考える。このような小農とは異なる要素の村内における出現を考えなければ、近世前・中期とは異なる幕末維新期固有の矛盾と運動の

意味が理解できないからである（ただし、私は「半プロ」ではなく、「半・前期プロ」概念を用いたいと思っている。拙稿「幕末維新时期村落論への視角」、「論集きんせい」一四、一九九二、参照）。しかし、世直し状況論には、①「半プロ」の実証抜きの量的過大評価と、②それに起因する民衆運動内部での「半プロ」の役割の過大評価という問題点があったように思われる。すなわち、「半プロ」はこれまで考えられていたほど村内に大量に存在したわけでもないければ、民衆運動に指導的な役割を果たしたわけでもないけれども、やはり変革期にあって固有の重要な役割を果たしたのではないか、というのが私の考えである。その固有の重要な役割とは、第一に、土地や農業に固執することなく、村で食えなければ町に出ればよいと考える層の出現によって、村落共同体の危機が進行したことであり、これが私が即自的解体要因として述べている点である。こうした状況は、地域によっては早く一八世紀末から農村荒廃というかたちで現出していた。しかし、同時に重要なのは、こうした危機が村落共同体の解体に直結するのではなく、共同体の論理によって危機を克服しようとする小農や在村型豪農の運動によって一定程度おし止められていたということである。天保期頃の荒廃農村の復興はその一表現だし、幕末維新时期においてもこうした状況は継続していたと思う。つまり、私の考えは、「半プロ」層の役割増大による村落共同体一路解体論でもなければ、幕末維新时期の民衆運動を小農や共同体の論理一色に塗り潰すものでもなく、両者の相互関連において村落をとらえようとするものである。思うに、共同体とは卵の殻のようなものであって、中の雛が十分孵化するまでは外的な危険から雛を保護しなければならぬが、ある時点に至れば破れて雛を外に出してやるべきものである。すなわち、共同体とは、小農経営が十分に独立した経営を営めるほど成長しないうちはその成長を助ける役割を果し、小農経営独立後はおのずとその役割を終えて消滅すべきものである。ところが日本においては、共同体が内在的にその役割を終える前に上から強権的に解体されたところに問題があったように思われる。話が横道に逸れたが、「半プロ」の固有の役割の第二に、村や土地か

ら自由な層の出現により、村方騒動がより先鋭化する点があげられよう。連光寺村の太郎吉が村方騒動において、仮に騒動の結果村を追われることになってもさして痛痒を感じないという自由な立場のゆえに、かえって村方騒動に積極的に関与しえたのはその実例であろう。彼は、「半プロ」層の固有の要求を代弁したわけではなかったが、しかし彼の行動は村内矛盾の激化にあずかって力あったのであった。

以上の二点が私の考える「半プロ」独自の役割であり、これが茂木氏の批判の②に対するお答えである。

③について。分村運動とは、茂木氏が指摘するように「村請制」村の捉え返しであって否定ではない。しかし、その捉え返しを重視したいというのが私の立場である。村請制がどこまで解体・否定されたかという点からのみ歴史の発展をはかるのではなく、村請制の枠組は残しつつもその内実をいかに民衆にとって適合的なものに変えていったかという視点からも、民衆運動の評価を行いたいということである。こうした一見些細な事柄の中からも、領主―農民関係の変化が見えてくるのではなからうか。ただし、この点に関して十分な展開をなしえなかった点については、今後の課題としたい。

④については、茂木氏の指摘のとおりである。この点は私も是非明らかにしたいと思いつつ大会報告では果せなかった。その後、連光寺村内の舟郷と他集落との関係については若干の検討を行った（『近世村落の身分階層構造―武蔵国多摩郡連光寺村を事例として―』、『部落問題研究』一二三所収予定）が、いまだ不十分であり、これも今後の課題とせざるをえない。

以上、私見について若干の補足をおこなった。御批判の労をとられた茂木氏に厚く感謝したい。